

幕末から明治にかけて、日本の激動期に偉大な足跡をのこした勝海舟。勝康さん（84歳）はその曾孫にあたる方です。自分から勝海舟の子孫であると名乗られないせいもあり、東久留米に47年住んでいても、地元で全く知られていなかったのです。その勝さんに曾祖父、勝海舟について語っていただきました。

勝海舟四代目 かつ やすし 勝 康 さん



「先祖の名を吹聴するな」と教えられ

勝海舟（1823～1899）には正妻たみとの間に、嫡子小鹿がいて、その小鹿には男子がなく、伊代、知代と二人の女子がいました。小鹿が40歳で急逝したため、海舟はその最晩年、孫、伊代に徳川慶喜の十男、精を婿養



勝海舟
渡米時、サンフランシスコにて（1860）



勝康さん所蔵の海舟直筆の掛け軸
「人の一生は重荷を負って遠き道を行くが如し」と「家康家訓」が書かれています。（いずれも写真提供 勝康さん）

子に迎え、家督を継がせます。海舟は明治20年伯爵を受爵していました。次女、知代も婿養子を迎え、勝康さんはその5男、8人兄弟の末っ子。勝家の分家にあたります。

「子どもの頃は自分の先祖について不勉強だったので、両親からは『絶対に先祖の名を汚すな。先祖の名前を吹聴するな』と戒められていました」と勝さん。一緒に暮らしていた、祖母の珠さんからは「晩年の海舟は気難しく、恐れ存在だった」というも聞かされていたそうです。

太平洋戦争以前は深窓の令嬢、令息として育った勝家の人々でしたが、戦争を境に一変しま

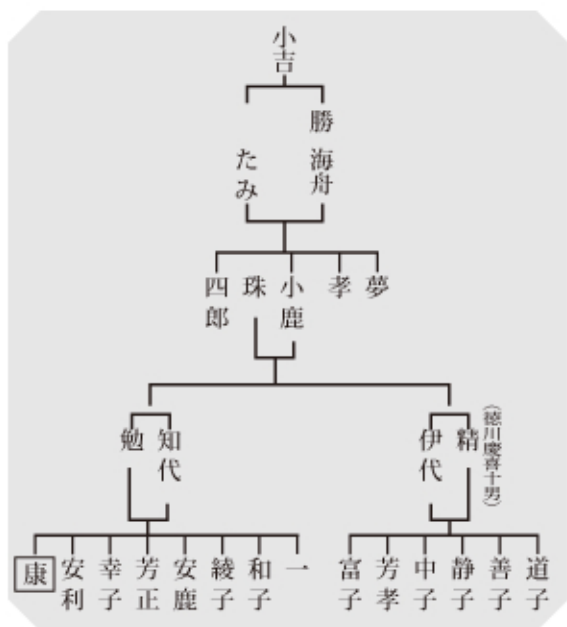
す。「赤坂は焼け野が原で本家も土蔵だけが残ったのみ。刀も何もかも進駐軍に持っていけました」。そして、長兄の安鹿さんは27歳で戦死。両親も他の兄弟も亡くなり、戦後は姉の幸子さんと康さんの二人だけが遺されました。当時は誰もがそうだったのでしようが、「栄養失調で死にかかったこともあった」とか。戦後事情を多くは語らない勝さんですが、相当な苦勞があったことと思われま

西郷隆盛との交友

勝海舟は下級幕臣、勝小吉の長男として江戸に生まれ、通称麟太郎。名は義邦（後に安芳）。海舟は号。剣術の達人、蘭学を学び、ペリー来航時は江戸で有数の蘭学兵衛家でした。万延元年（1860）咸臨丸の指揮官として渡米。神戸海軍操練所を設立し、幕臣だけでなく、脱藩志士も教育しました。その塾頭が坂本龍馬。海舟と初めての面会後、龍馬はすぐに弟子志願したと伝えられています。龍馬は姉乙女に宛てた手紙に「この頃は天下第一の軍学者、勝麟太郎という大先生の門人となつて」と記しています。

勝康さんは、近代日本の運命を担った江戸無血開城実現を「西郷隆盛がいたからこそできたこと」といいます。迫り来る官軍の江戸城総攻撃直前に行

曾祖父は幕末の雄 「勝海舟」



われた、旧幕府方を代表する海舟と西郷隆盛との交渉により、江戸城下での市街戦は回避され、150万人の江戸住民とその財産が守られた。それ以前に海舟が軍艦奉行の時、初対面した西郷は大局を説く海舟の知略、有能さに驚き、「ひどく惚れ申し候」と大久保利通宛てに書いています。一方海舟も「太っ腹で見識ぶらない豪傑」と西郷を称え、お互いが尊敬の念を持ちあっていたことが分かります。

「無私と至誠、二人とも同じ価値観でつながっていたから、理解し合えたのでしょ。海舟は『功なく名もなく、貴と栄を求めず』という言葉を残して

いますが、西郷さんにも同じような言葉がありますね」。生前に造った、大田区洗足池畔にある墓には、ただ「海舟」と名前が刻まれているのみです。

海舟は西南戦争で非業の死を遂げた西郷の名誉回復に尽力し、明治12年独力で留魂碑を建立。現在は海舟の墓域に移されています。また西郷の遺児たちの面倒まで見て、海外留学する際も援助しているのです。

曾祖父の鍛錬を継承したい

「眼光鋭く、相手の反応を見て、即ちそういう人間かを見抜く人だったようです。取っつきにくい、一癖も二癖もある嫌なオヤジだったんでしょう(笑)」身内ならではの発言です。自己を確立した個人主義、舌鋒鋭く、その先駆的な考えには、時代が後から追っかけていったでしょう。3千頁に及ぶ蘭和辞典を2部筆写した根気。20回も暗殺を謀られながら助かったのは、若い頃、厳しい剣術と禅の修行を乗り越えた胆力のため。「執念的な努力と、鉄壁な意志、肝の据わった度胸。根っからの武士だったと思います。生い立ちからいえば、政治家というより軍人だったのでは」。そのことはさらに、父の小吉が喧嘩っ早い暴れん坊だったことに起因するのは……と勝さん。「普通だと息子はグレますよね(笑)」。し

かし海舟は父親を反面教師として自分を磨いた。小吉もでたらめなオヤジだったけれど、子どもへの愛情は人一倍だったようで、剣術や蘭学をやらせたのも小吉です」。

勝さんは某会社役員を最後に現役引退し、現在は「勝海舟の会」の名誉会長を頼まれ、会員とともにその足跡を辿る歴史散歩などを楽しんでいきます。84歳の今、「せめて海舟の身体の鍛え方を継承したい」と週に2、3回のテニス、毎朝1時間の鉄アレイ筋トレ、そして南沢湧水辺りの5キロの散歩は欠かしません。テニスは60年、鉄アレイは20年も続けているとか。艶やかなお顔、背筋真っ直ぐ、とても80代には見えません。穏やかな笑みを絶やさず、控えめに語ってくださいましたが、勝さんのご長男の名前が「舟一郎」と聞き、勝海舟へ寄せる深い思いが伝わってきました。(東久留米市在住)

「勝海舟を語る」

3月28日(土) 14時~16時

東久留米市民プラザ

講師 角田望氏

(自由学園男子部教諭)

講演後、角田さんと勝さんがトークライブ

☎042(470)7813

市民プラザ